



書くことと生きる力

京都女子大学教授・京都女子大学附属小学校校長 吉永 幸司さん

今春よりスタートする、新学習指導要領による授業。子どもの「生きる力」を育むため、さまざまな目的が掲げられるなか、「言語活動」に置かれる比重はとて高くなっています。そこで、今回は、京都女子大学附属小学校の校長・吉永幸司さんに、子どもたちに必要な「書く力」とその育て方などについて、お話を伺いました。

「書くこと」とは
生きている今を記録すること

子どもにとって「書くこと」が大切なのは、どうしてでしょうか。

書くことは、子どもにとって、とても大きな意味を持っています。なぜなら、書くとは、つまり、その子が今生きている歴史を、目に見える形にして残すということだからです。

そういう意味で、話すことと書くことは、まったく異なっています。例えば、「今日何をしましたか」と聞かれ

て、「こんなことをしたよ」と話しても、それは瞬時です。その一瞬だけの会話ですから、後々までは残りません。しかし、もしもそれを日記として書いたならば、残りますよね。書くとは、その瞬間を切り取って保存し、残すことです。今日は何んなことが楽しかったのか、何があったのか。その瞬間、瞬間を一生懸命生きているという証であり、その積み重ねが、その人の一生になります。

さて、この「書くこと」、特に日記指導などを行う場合には、もうひとつ

の大きな意味があります。

子どもが、一日を振り返って日記を書きます。それを読むことで、私たち教員は、子どもの送っている生活を知ることが出来ます。私たちは、その子どもが小学校で過ごしている時間のことはわかります。しかし、家へ帰ってから何をして、どう過ごしているのかは、わかりません。今日は友達とドッジボールをしたとか、鬼ごっこをして遊んだとか。そういった、子どもの生活についての空白部分、知らない部分を、日記によって知ることが出来ます。

日記指導は、国語教育という意味だけではなく、そういう一面も持っているのです。

もちろん、毎日日記を書くように指導していても、書けない子どももいます。毎日のことですから。しかしそれは、書けないことが悪いのではなく、書けない日は書けるようなニュースが見つけられなかったということなのです。このように見ていけば、書くことがなかった空白の期間、それもその子の歴史なのです。子どもたちは、傾向として、うれしいことがあった日は、たくさん

書きます。小学生が、書きたくなるときというのは、生活も体調も調子がいいとまであることが多いですね。

そして、いざ書くとなると、「何を書こうかな」と考えます。「何を書こう」と思った時点で、自ら、その日の出来事を思い出し、整理して、ひとつを選択するという作業をしています。さらに、読み手を想定して、読みやすいようにきれいに書こうとします。

こう考えていくと、国語の勉強というのは、そんなに難しい、特別なことではないのです。

「書かせる側に必要な「読み取る」責任

子どもが書いたものを、どのように読んでいけばいいでしょうか。

親御さんにお願したいことがあります。それは、「子どもが書いたものは、できる限り大切にしてください」といことです。

子どもたちは、書くとき、一つひとつについて、こちらが思っている以上に考えています。書き出し、内容、使用する表現など、実にいろいろと頭を悩ませて書き始めるのです。

読むほうにも覚悟が必要になります。書いて残す、結果的に「残ってしまっ」ということは、子どもであってもそこに意識が働きますから。しかも、今日何があったかな、と思い返し、24時間という長い時間の中からひとつを選び出して書く、という経験は子どもにとってはそうありませんよね。

このように、書くというのは、大変な作業をしているということです。だからこそ、子どもが書いたものは、ご家庭でも、大切に丁寧に読んであげてほしい。書いたものを大切にしてもらえれば、いい子に育ちます。

いきなり「書きましょう」と言われても、難しい子どももいますよね。

もちろん、いきなりひとりて書くのは難しいことが多いでしょう。だから、見てあげることが大切なのです。

これは、私が感じた傾向としてなのですが、自分が日記や文章を書く親ほど、子どもの書いたものを丁寧に読んであげていますね。自分自身、まったく書かない人ほど、ケチをつけるんですよ。書くことの労力を実感してないからかもしれません。

いずれにせよ、「見られるものだ」という意識があれば、自分の基準でしっかりと取捨選択をして、子どもは頑張って書きます。

例えば、こんな日記がありました。「お父さんが10時に帰ってきた。一緒にお風呂に入った。楽しかった。」それだけです。

確かに、ただなんとなく読んでしまうと、短い日記ですが、ここでよく考えてみましょう。

夜10時というのは、小学生の子どもにとつては、随分遅い時間です。つまりそこからは、「一緒にお風呂に入ろう」と思って待っていたのかな、お父さんが出張に行っていて数日ぶりに帰ってきてうれしかったのかな、待っている約束があったのかな、など、いろいろと推測できることがありますね。そうすると、この日記を書いた子どもにとつて、10時という時間は、とても大きな意味を持つてきます。

しかも、普通に考えると、10時に帰って即、お風呂、ではないですよ。お風呂に入るまでは少なくとも15分とか、それくらいは時間がかかります。つまり、その時点から一緒にお風呂

に入っていたら、さらに時間は遅くなります。11時を過ぎていたかもしれません。でも、この子は、日記にそれを書いています。お風呂から出て、寝る前に書いたのでしょうか。きつと眠い目をこすりながら、それでもそのことが書きたくて、頑張つて、そして、それを先生に提出してくるわけです。

そう思えば、「なんだ短い日記だな、なんて言えないですよ。」

日記を書かせた私たちは、これをちゃんと読み取らなければいけません。それが、書かせる側の責任でもありませんよ。訂正の必要はありません。できませぬよね。もしも、どういう状況かわからなかったら、「これはこういうこと？」と聞いてあげてください。それで、本人が書きたいことと読み取れることが違う場合は、「こんな風に書いたほうが伝わりやすいよ」と、教えてあげればいいわけですから。

このように、書かれていること自体は些細に見えることでも、その中にはいろいろなお話が詰まっています。だからこそ、ほんの一言でも、思ったことを書き留めておくということは、意味があるので。

子どもをけなさないことが書かせ上手になる秘訣

「書くこと」が好きな子どもには、どうすればなるのでしょうか。

子どもが「書くこと」を嫌うようになるのは、「もっと上手に書きなさい」とか、「こんな書き方は駄目」だとか、批判されるからです。

先程お話ししましたように、子どもは、文章を書く際には悩みます。「先生やお母さんに見せるのに、こんなこと書いたら駄目かな」と考えて、書きつらさを感じることもあるでしょう。そんなことを思うのは、自己評価をしたからですよ。一生懸命考えた結果なのです。だから、アドバイスをする方法も少し工夫しましょう。例えば、「頑張つて書いているのだから、せつかくならより上手に書いてみよう」と言ってみるのです。そして、文末の表現がずつと、「だった」と書いていたなら、「でした」という書き方を教えてあげるんです。そして、次回、できていたら褒めてあげてください。褒めればさらにできるようになりますから。

私たちがよく授業で行うのは、教科

書の中から、「使つてみたい言葉」を集めさせるといふ方法です。そして、集めた言葉を使つて日記を書くのです。これを「言葉の貯金箱」と言っています。貯金箱の中の言葉を使つた日記を書いて、上手に使えていたら、褒めてあげる。すると、子どもも「見てくれているな」と実感します。そうすれば、「また使つてみよう」と思えます。学ぶとはこれの繰り返しですね。

良い言葉をたくさん使って人生をより豊かに

学校で、気をつけて指導されていることは、どんなことですか。

最初にお話ししたように、書くということは、その瞬間の思いを切り取つて表現し、残すことです。そして、思考を残すため、書くために、徐々にじっくりと考えられるようになります。

そんななか、さらに大切なのは、書いたものを読んでもらえる環境です。読んでもらう相手がいる状況で、手紙や日記を書く、読み手を持つてもらうことができます。その、読み手にわかってもらおうという気持ち、相手を尊重する気持ちを育てます。それが人間



1年生のこくごノート
5月(右)6月(左)



1年生の親子日記



性の形成に大きな力を発揮するのです。子育ては、手間と時間が必要ですが、ところが、大人は何かと忙しくて、その時間が取れないから、簡単に「はい、勉強しておきなさい」になりがちです。私たちの学校では、そんな簡略化した「勉強」の仕方にならないよう、とても気をつけています。授業では、ノートをとることに、重点を置いています。文字を書くこと、ノートのとり方を通じて、言葉の大切さを教えたいと思うからです。書くことは要するに考えるということ。学んでほしいのは、考え方です。また、月に1回くらいですが、親子

日記ということもやっています。

1枚の用紙の表に子どもが日記(低学年は絵日記)を書き、裏に親が日記を書く。そこへ担任と校長がコメントを書きます。

私は、そのときには、嘘でもいいから、良い言葉を使いなさいと指導します。現実問題として、悪い言葉のほうが、子どもの世界では浸透が早いんです。対して、いい言葉は努力しないと、訓練しないと使えない。だから、できるだけ良い言葉を使ってもらおうのです。そうすれば、言葉を学ぶために辞書も使うし、新聞も利用しますしね。人生というのは先が見えません。一秒後には何があるかわからないでしょう。だから、せつかくだから、前向きに、希望のある言葉を使いましょう。反省、と言って悪いことを書くよりは、今後こうしたいこうと書くほうがいい。別に、とりたてて指導をしなくても、喧嘩した後で、日記を書いたら「私が悪かった」と書く子どもが多いのです。書くという作業を通して冷静になって、自然に反省もできるんですね。また、学校生活の中で、基本的に、お互いを「さん」と呼ばせるよう

にし、返事はきちんと「はい」と言うように、そしてできるだけ丁寧語で話すように、という指導をしているのもそのためです。常日頃から、丁寧できれいな言葉に慣れてもらう。使えるようになってもらう。けんかをして、も述べが丁寧語なら、だんだん落ち着いてくるでしょう。一方的に怒れない。言葉とはそういうものなのです。言葉を大切にすることを通して、子どもたちがより豊かな人生と生きる力を手にしてくれることを、希望しています。

プロフィール

1940年滋賀県長浜市生まれ。
滋賀大学学芸学部卒業。滋賀県内の中学校教諭を3年間、滋賀大学教育学部附属小学校教諭を26年間、県内小学校の教頭、副校長を経た後、現職に。「書くこと」で育つ学習力・人間力(明治図書)『吉永幸司の国語教室』、『京女式』ノート指導術。(小学館)など著書多数。

